

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520710

研究課題名(和文) 近代山村開発史の民俗学的研究—熊本県五木村を事例にして—

研究課題名(英文) The Research on the history of the mountain village development in modern Japan : A Case study of Itsuki-mura, Kumamoto Prefecture

研究代表者

湯川 洋司 (YUKAWA YOJI)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：10166853

研究成果の概要(和文)：

近代以降の山村開発史がもった意味を、熊本県五木村を事例に、①五木銅山、②水力発電、③製炭業、④ダム建設計画に絞って分析した結果、従来の開発は山村自身の生活向上に寄与するところが大きかったが、戦後のダム建設計画は、山村社会を水に沈めなければならない計画である点で、住民には希望のない開発手法であることが明らかになった。今後は、山村の自律性を確保できる開発行為が求められることを結論として得た。

研究成果の概要(英文)：

The purpose of this research project is to analyze the meaning of the history of mountain village development in modernization of Japan, using the data which collected by field survey in Itsuki-mura, Kumamoto Prefecture.

As a result of examining the following four development works that were important in the history of development of Itsuki-mura, 1) operation of the Itsuki copper mine, 2) construction and operation of a hydroelectric power station, 3) a charcoal burning, 4) a dam building plan, the following thing became clear.

The former development of a mountain village utilized the resources of the mountain village, and has realized improvement of life and welfare. On the other hand, it became clear that dam building program planned in the postwar period were hopeless plan for the inhabitants of Itsuki-mura, because of sinking them into the water.

In conclusion, I can say that in the future development of a mountain village needs to be made by the method to secure autonomy of village.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：山村、開発史、民俗学、五木村

1. 研究開始当初の背景

昭和50年(1975年)以来これまで、五木村において長期間にわたり断続的に民俗調査を継続し、「ダンナ家」「堂」「ダム建設に伴う村落移転」をテーマにして調査研究を進めてきた。その過程において、山村の生活に対して種々繰り返されてきた「開発」事業が持つ影響力の大きさを強く意識するようになり、開発に視点を定めた山村史を描くことは山村の現状を理解し将来を展望するうえで欠くことのできない作業であると考えに至った。特に開発事業が当該の山村にもった意義や意味を検討し明らかにすることは開発行為や開発という問題自体を実証的に検証するうえで極めて重要である。開発事業は山村に明るい未来を開いてきた側面もあり、同時に負の側面もあった。その正負を分ける開発のあり方を探りその特性を明らかにすることは、山村の歴史に対する理解や認識を深めることはもちろん、さらに現在及び将来の開発事業のあり方を点検し、評価し、望ましいあり方を構想するうえに大きな意義をもつと考え、この研究テーマを構想した。

日本の山村に関する民俗学的研究は、『山村生活の研究』(昭和11年)から本格的に始まり、山村に伝えられてきた民俗の意味の解釈や日本全体にわたる山村の類型化を通じた山村生活変遷史の解明と民俗誌の作成に力が注がれてきた。しかし、個別の山村の歴史とその結果生じた問題点について考察した研究は少なく、また山村の近代化、さらには近代化を開発史の視点から実証的に検討した研究は少なかった。

『日本民俗学』210号(1997年)では「地域開発と民俗変化」の特集が編まれ多くの事例と問題が具体的に提示され、説明された。これは山村に特定されたわけではなかったが、「開発」のテーマを正面に据えた点で画期的であった。開発の対象になった地方村落の生活史に即して開発の意義や効果を問う研究が今後必要になるものと考えられる。この観点から、佐久間ダムを扱った町村啓志編『開発の時間開発の空間 佐久間ダムと地域社会の半世紀』(2006年)は、特に佐久間ダムとその地域を対象に1950年代からの半世紀という時代設定を明確にしてダムがもたらした種々の問題が分析されおり、開発の意義と意味を問ううえで方法論的に学ぶことが多く参考になるものであった。

そこで、これらの研究動向も参考にして、特に山村の経済活動を軸にして、山と川と公共事業の3つの局面について、史資料の収集

と聞き書き資料を併用して具体的に開発史の動きを跡付けることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、九州山地の中央部に位置する熊本県五木村における明治以降の各種の開発事業の展開史を文書記録(家文書、行政資料、関係企業資料)と聞き書きにより復元し、それぞれの時代相と照らし合わせながらその意義と意味とを明らかにする。今日、川辺川ダム建設計画以来40年もの間、ダム開発で翻弄される五木村の歴史を開発史の観点から見直し、混迷する現状を乗り越えて村の未来を構想するための一助とするとともに、五木村の事例研究を通じて、日本における近代山村開発のあり方を問うための一モデルとして提示することを目指した。

3. 研究の方法

近代以降の山村開発史がもった意義と意味を、熊本県五木村を事例にして、①山林・鉱山等の「山の開発」(地元資本を中心にした開発)の事例、②水力発電などの「川の開発」(外部大資本による開発)の事例、③昭和38年~40年に発生した水害の復旧に対する公共事業(政策的開発)の事例の3つに区分して、収集・整理した史資料を踏まえて開発事例を分析し、それぞれの実情を具体的に明らかにしようとした。

また、開発行為と住民の暮らしの向上との相互関係を一つのモデルとして提示することを目指した。

〔調査方法〕

- (1) 五木村の現地調査(関係者への聞き書き・関係史資料収集)を重点に行った。
- (2) 上記の調査と並行して、五木村の諸機関、関係企業・行政機関・図書館等で関係記録資料の調査・収集を進めた。
- (3) 開発事例に関与した人物に関する資料、及び関与企業等の所蔵資料について、実地調査を実施して収集した。

〔調査等の実施〕

平成20年度

(1) 現地調査の実施

五木村において、炭焼き、木材伐採・搬出に関する聞き書きを行い資料を得た。五木村外や熊本県外から入り込み定着した人々もあったことが確認できた。

(2) 史資料の調査収集

人吉市立図書館、熊本県立図書館、五木村森林組合、国土交通省頭地資料室やませみにおいて、調査を実施した。

(3) 関連資料調査の実施

①五木銅山の経営者であった中江種造について、出身地の兵庫県豊岡市の市立図書館で調査を実施した。

②川辺川の木材流送開発を行った松岡長康について、熊本県八代市立図書館で調査を実施した。

(4) 五木村開発史年表の整理

調査により得られた資料等に基づき、年表作成を行った（次年度へ継続）

平成 21 年度

(1) 現地調査の実施

五木村において、河川開発と河川利用の事例、五木村内各地に所在する商店の成立と営業・役割、山林利用の変遷事例について、関係者等から聞き書きを中心にした調査を行い、資料を得た。

(2) 史資料の調査収集

人吉市立図書館、熊本県立図書館、成城大学柳田文庫等において、木炭生産に関する文献・統計資料、人吉球磨地方・五木村の開発史資料の調査を実施した。

(3) 関連資料調査の実施

①五木村内に水力発電所を持つ（株）チッソ水俣製造所を訪れ、関係資料（全 30 冊）の貸与を受けた。

②水俣市立図書館において、（株）チッソの社内報等を閲覧し、関係資料を収集した。

(4) 五木村開発史年表の整理

調査により得られた資料等に基づき、年表作成を行った（次年度へ継続）

平成 22 年度

(1) 現地調査の実施

五木村において、戦後以降の建設業の展開、山産物流通と商店の役割、水力発電所の営業、在来農産物生産の推移と実態等について、関係者等から聞き書きを中心にした調査を行い、これまで収集した資料の補充や確認を行った。

(2) 史資料の調査収集

五木村役場・教育委員会・商工会、県立人吉高校五木分校、熊本県立図書館において、資料の補充・収集と確認を行った。

(3) 関連資料の整理・翻刻

昨年度閲覧のため貸与を受けた（株）チッソの水力発電所関係資料を一覧に整理し、一部を翻刻した。

(4) 成果報告書の作成

五木村の開発史のうち、①五木銅山の操業（明治時代後半）、②水力発電所の建設・操業（大正末期・昭和初期以降）、③製炭業（明治時代～戦後）、④ダム建設計画（戦後～現

代）の 4 つの局面に絞って分析・考察を行い、報告文と資料編（年表・収集資料一覧・史資料翻刻・写真等）から成る報告書を作成した。

開発史年表は、明治時代以降の五木村の開発史を、①「山の開発」、②「川の開発」、③「公共事業」の 3 つに区分して示した。

4. 研究成果

(1) 明らかになった事実や見解

①五木村においては、明治時代以降に、山林資源を活用する開発がまず進められた。椎茸原木（ナバ木）の伐り出し、炭焼き、さらには林木の伐出などである。多くは人吉や八代などの地元資本によるものが多く、五木村内の椎茸栽培や炭焼きの仕事を生むことにもなった。また炭焼きは県外から従事者を呼ぶことになり、五木村の人口増加、生産力向上に資するところがあった。

しかし、昭和 38 年の水害により多くの炭窯が流出し、これに伴い五木村を離れる炭焼きが多く見られた。

②山林資源の開発は、その生産物の搬出移動にかかわる生業の必要性を生じさせて、木材搬出にかかわる山師たちの流入と五木村内での発生を促した。山林内から搬出された木材は、川に入れられて下流へと流送されて、川の開発も促した。

③川辺川の開発は、八代（旧高田村）出身の松岡長康によりなされたが、その事跡の詳細については、資料探索を試みたものの、十分には明らかにすることができなかった。今後の調査と解明を期したい。

④五木村大平に所在した五木銅山は古くから開発されたが、停止と再開とを繰り返しながらも明治 22 年(1889)から兵庫県の旧豊岡藩出身の中江種造により経営され、その生産は自前で建設した水力発電所で発生させた電力を用いるなど、当時最新鋭の機械設備をもってなされたが、他方で煙害を生じさせるという負の側面も呈した。同鉱山については、植田晃一氏の先行研究があり、その資料を活用させていただくとともに、豊岡市立図書館を訪問し閲覧した『中江種造傳』が有益な資料となった。ただ、五木村民が同銅山の事業に従ったのかという点も含めて、五木村や住民との具体的ななかかわりについては不明のままであり、今後さらなる解明が必要である。

⑤大正時代末期に設置申請がなされて昭和初年に落成、営業を始めた日本窒素肥料株式会社（後、チッソ）の 2 つの水力発電所（頭地発電所・竹ノ川発電所）は、五木村内へ旧来の水利権に基づき水を供給し、これは生活用水として利用されるほか、水田化を促進させることにもなった。また村民のなかから社員として雇用される者も現れて、五木村の住民生活の向上に寄与するところがあった。ま

た、発電所関係者の社宅が作られ、村民へ対して映画上映を行うことや野球大会を開催するなど、五木村の文化的向上に資する役割も果たした。水力発電所の建設に伴い、従来の木材流送や川漁に影響を与えたが、関係者との調整を行い、所要の対応がなされた。

⑥戦後になって五木村を襲った大きな開発計画はダム建設計画（下頭地ダム昭和30年発表、相良ダム（後、川辺川ダム）昭和41年発表）であった。五木村はいずれの計画にも反対したが、川辺川ダム計画が長期化するにつれて村外へ移転する村民が多くなり、村はダム建設を容認したうえで村の生活再建を進めるところまで事態が進んだ。しかし国の政権交代により「中止」へと方針が変わった。この計画は、当初から五木村の住民の望むところではなく、村の主要機能を担う地域を水没させるという計画自体が、村民には希望の見えないものであった。またこの計画を進める過程では五木村の経済が土木建設業を主体とする構造へと移行するところとなり、村の自律的経済や自律性を損なう結果を招いた。このことにより、ダム建設計画は従来の山や山の資源を活かした開発手法とは異質であり、山村社会には受け入れにくい手法であったといえる。

以上のところから、近代以降の五木村における開発が住民生活に持った意味は、大きく次の3点に要約できる。

1. 従来の開発は、山村自前の資源を活用し、山村自身の生活向上や福祉の増進に寄与するところが大きかった。

2. これに対し、戦後2度にわたり計画されたダム建設計画（下頭地ダムと川辺川ダム）は、山村社会を水に沈めなければならない計画である点で、五木村の住民には希望の見えない開発手法であることが明白になった。

3. また川辺川ダム建設計画が長期に及ぶ中で、五木村の経済が次第に自律（立）性を失い、建設業に偏した産業構造に依存する傾向を助長したことも、それ以前の開発行為とは異なる特徴である。

以上のところから、今後は、山村の自律（立）性を確保できる開発行為が求められると言える。

（2）成果物

史資料の収集・整理を踏まえて分析・考察を行い、五木村の開発史を4つの開発事業に即して分析考察した報告文（全34頁）と、資料編（全120頁）（年表・収集資料一覧・史資料翻刻・写真等）から成る報告書を作成した。

①報告文では、①五木銅山の操業（明治時代後半）、②水力発電所の建設・操業（大正末期・昭和初期以降）、③製炭業（明治時代～戦後）、④ダム建設計画（戦後～現代）の

4つの局面に絞って分析を行った結果をまとめ、今後の開発のあり方について、五木村の事例を踏まえて提言を行った。

②「五木村開発史年表（第1版）」を作成し、成果報告書に収めた。年表は、山の開発・川の開発・公共事業の3つに区分して表示した。時代を経るなかで次第に公共事業の比重が高まってきたことが読み取れる。

③資料収集に関しては、特に（株）チッソ（現JNC（株））が五木村内に建設した2ヶ所の水力発電所に関する資料群を個々の文書ごとを一覧にまとめて収載し、またそのうちの一部を翻刻した。その他、関連資料を翻刻し、いずれも成果報告書に収めた。

④資料編に収めた資料は、五木村における川の開発史の考証資料として活用が期待される。また今後の山村史研究を具体的に深めていくうえでも有益な資料になるものと考えている。特に旧（株）チッソが建設した五木村内に所在する2つの水力発電所に関する資料は、所蔵するほぼすべての資料群を一覧化したことにより、企業活動と山村開発の具体像を探る今後の研究上に貴重であり、裨益するところが大きいと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①湯川洋司、高度経済成長と山村生活の変化、国立歴史民俗博物館研究報告（掲載決定通知受領済み、掲載号未定）、査読有、2011年発行予定

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計2件）

①湯川洋司、成果報告書「近代山村開発史の民俗学的研究－熊本県五木村を事例に－」2011、山口大学、報告全34頁、資料編全120頁。

②湯川洋司、消滅した山の仕事、国立歴史民俗博物館編「高度経済成長と生活革命」所収、2010、吉川弘文館、87-92頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯川 洋司 (YUKAWA YOJI)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：10166853

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし